

平成三十年度
八戸学院大学

一般入学試験（後期日程）

国 語

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちが棲むこの宇宙において、輝けるものはいつかは錆び、水はやがて乾き、熱あるものは徐々に冷えていく。時間の経過の中で、この流れに抗することはできない。

科学はこれまで人間に可能なさまざまなことをもたらしたが、同時に人間にとって不可能なことも教えてくれた。それは時間を戻すこと、つまり自然界の事物の流れを

これが「エントロピー増大の法則」である。エントロピーとは「乱雑さ」の尺度で、錆びる、乾く、壊れる、失われる、散らばることと同義語と考えてよい。

秩序あるものはすべて乱雑さが増大する方向に不可避的に進み、1その秩序はやがて失われていく。ここで私が言う「秩序」は「美」あるいは「システム」と言い換えてもよい。すべては、摩耗し、酸化し、ミスが蓄積し、やがて障害が起こる。つまりエントロピーは常に増大するのである。

生命はそのことをあらかじめ織り込み、一つの準備をした。エントロピー増大の法則に先回りして、自らを壊し、そして再構築するという自転車操業的なあり方、つまり「動的平衡」である。

A、長い間、「エントロピー増大の法則」と追いかけてこしているうちに少しずつ分子レベルで損傷が蓄積し、やがてエントロピーの増大に追い抜かれてしまう。つまり秩序が保てない時が必ず来る。それが個体の死である。ただ、その時にはすでに2自転車操業は次の世代にバトンタッチされ、全体としては生命活動が続く。現に生命はこうして地球上に三八億年にわたって連綿と①イジされ続けてきた。だから個体というのは本質的には利他的なあり方なのである。

生命は自分の個体を生存させることに関してはエゴイステイックに見えるけれど、すべての生物が必ず死ぬというのは、実にYなシステムなのである。これによって3致命的な秩序の崩壊が起こる前に、秩序は別の個体に移

行し、リセットされる。

B 「生きている」とは「動的な平衡」によって「エントロピー増大の法則」と折り合いをつけているということである。換言すれば、時間の流れにいたずらに抗するのではなく、それを受け入れながら、共存する方法を採用している。

私たちの皮膚は驚くべき速度で更新されている。皮膚を作る細胞層（真皮）は常に新しい層を作り出し、それを押し上げている。皮膚や髪の毛がそうして更新されているのは比較的たやすく実感することができるが、動的な平衡状態にあるのは、皮膚や髪の毛だけではない。

全身の細胞が一つの例外もなく、動的な平衡状態にあり、日々、壊され、更新されている。皮膚が内側に折りたたまれた消化管や内臓の細胞も、絶え間なく壊されては作り出されている。

細胞の **a** 分裂が起これないとされる心臓や脳でさえ、個々の細胞の中身はどんどん壊され、新しい分子に置き換えられている。一見、永続的に見える骨や歯も、その内部では常に新陳代謝が進行し、壊されながら作り替えられているのである。

生命は、こうして、不可避的に身体の内部に蓄積される乱雑さを外部に捨てている。この **②セイミョウ** な仕組みこそが、生命の歴史が三八億年をかけて組み上げた、時間との共存方法なのである。

C、私たちは時として、その共存方法を **b** 無視し、時計の針を逆回転させたい欲求にかられる。額や頬に刻まれたシワを伸ばしたいと願い、抜けてしまった頭髮を植え込みたいと願うのである。

しかし、生命現象を支えるサステイナブル（持続可能）な仕組みは総合的なものである。4 老化の目立つ身体の一部に単一の原因を求め、単一の有効成分に救いを求めようとするのは、悪しき還元主義に陥ちこんでいると言わざるを得ない。

たとえば、化学合成された薬物はいつとき身体の一部に劇的な作用を示すが、まもなく身体はその揺れを戻して作

用を無効にしようとする。生命現象は動的な平衡状態なのだから。

D、精製された薬物を③セツシュするより、同じ薬物を含んだ薬草を丸ごと食べたほうが効果があることがしばしばある。それは薬草に含まれるものが単一の成分ではなく、複合的なスペクトルを持った薬物群であり、それらが生命の平衡を押し下いたり引いたりして、バランスを回復するのに有効だからと考えられる。ここでも単一の成分による単一のベクトルだけで作用を考える還元主義の限界が露呈している。

私たちにできることはごく限られている。生命現象がその本来の仕組みを滞りなく④ハツキできるように、十分なエネルギーと栄養を摂り（秩序を壊しつつ再構築するのに細胞は多大なエネルギーと栄養を必要とする）、サステイナビリティを⑤ソガイするような人為的な因子やストレスをできるだけ避けることである。

かくして私たちは極めてシンプルな箴言しんげんに出会うことになる。それは、**5**アンチ・アンチ・エイジングこそが、エイジングと共存する最も賢いあり方だということである。

（福岡伸一『動的平衡』木楽舎）

問一 傍線①～⑤の片仮名を漢字に改めなさい。

問二 空欄A～Dに入る適当な語を次の中から選び、符号で記しなさい。

イ　そして　　ロ　また　　ハ　しかし　　ニ　したがって　　ホ　ところが

問三 空欄 X、Y に入る適当な語を文中より抜き出して記しなさい。

問四 傍線 a、b の対義語を漢字で記しなさい。

問五 傍線 1 について、これは生命にとって何を意味するか。文中より抜き出して記しなさい。

問六 傍線 2 とあるが、この比喩的表現はどのようなことを言っているのか。文中の語句を用いて四十字以内で記しなさい。

問七 傍線 3 とはどのようなことか。文中の語句を用いて七十字以内で具体的に記しなさい。

問八 傍線 4 とはどのようなことか。文中の語句を用いて四十字以内で記しなさい。

問九 傍線 5 について、「エイジング」は「老化・加齢」の意であるが、では「アンチ・アンチ・エイジング」とはどのようなことか。文中の語句を用いて五十五字以内で記しなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長い間、この日本社会で私たちは「他者の欲求」を生きさせられてきた。他の人が欲しいものをあなたも欲しがりなさい。そして「他者の目」を過剰に意識させられてきた。他の人が望むようなあなたになりなさい。しかし、そうやって自分自身の「生きる意味」を他者に譲り渡すことによつて得られてきた、経済成長という利得は既に失われ、私たちは①シンコクな「生きる意味の病」に陥っている。

そこで彗星のごとく現れ出た「構造改革」は、私たちをがんじがらめの不毛な「生きる意味」から解放する、自由の使者のように登場した。しかし、それは一見自由に見えて「生きる意味」においては私たちに全く自由を与えない。「高い報酬を与えられる」ということ、「高い数字を得る」ということが誰にとつても究極の価値であるという目標が与えられ、その目標を達成するための競争においていままではいろいろな障壁があつたのでそれを取り除き、これからは自由に競争できるようにしましょう、という社会は果たして自由な社会であろうか。それは「競争の自由」であつて、決して「生きる意味の自由」ではない。

A

私たちの「生きる意味」はこれまでよりもいっそう「数字」に縛りつけられることになるのだ。

私たちの抱えている一番の問題、それは私たちが「生きる意味を生み出す自由」を②カクトクしていないということだ。私たちの「生きる意味」は誰かから与えられる。そしてその「生きる意味」に向かつてなるだけ効率的に生きなさいという社会。私がいよいよといまいと、私の「生きる意味」は最初から決まっているように感じられてしまう社会。それは私たちの社会の意味のシステムと私たちひとりひとりの意識が重なり合つて生まれている「生きる意味の病」なのである。

そこからの脱出は、私たちひとりひとりが自分自身の生きる意味を創造していける社会への変革である。へ生きる意味を創造するものとしての人間」という人間像こそが、私たちを解放へと導くものなのである。

「社会に生きている人間は誰もが高い報酬を得ることを第一の欲求としている」ということが前提とされている社会の、「生きる意味」におけるあまりの貧しさは、既に繰り返し指摘してきた。仕事のやりがいには報酬の額だけではない。自分の仕事に対する誇り、自分の技量が生かされ、自分ならではの③**コウケン**ができることの喜び。仕事を取り結ぶ人間関係の豊かさ。報酬の額という数字ではなく、「仕事自体」の喜びがそこにはある。

B、仕事からの報酬はそこそのものでいい、家族との時間やオフタイムの趣味が楽しくてしようがないという人もいるだろう。例えば『釣りバカ日誌』のハマちゃんは**甲**サラリーマンで、出世街道にも乗りそびれてい

るけれど、しかし彼はとても幸せそうだ。それは彼が彼独自の「生きる意味」に支えられているからで、釣りの世界では社長ともタメ口がきけてしまうような自由さがそこにはある。そしてその「生きる意味」をかわい奥さんも支えてくれているのだから、本当に果報者である。私はこれまで「二一世紀の人間像」といった講演やシンポジウムで、この『釣りバカ日誌』のハマちゃんを「これぞ二一世紀社会における一番「強い」人間像だ」と紹介したことが何回もあるのだが、それは彼が「生きる意味」の創造者であり、**2**「生きる意味」の自立を成し遂げているからである。

経済的に自立していても、「生きる意味」において自立していなければ、私たちはこの社会システムの奴隷となってしまう。学校の成績が良くても、本当に自分のやりたいことが分かっているなければ、私たちは単なる「いい子」だ。そこから本当に自分自身が「意味の創造者」となれるかどうかが問われているのである。

私たちはこれまで常に「誰かが意味を与えてくれる」ことに慣れてきた。子どものときは親が意味を与えてくれる。学校が意味を与えてくれる。そして就職すれば会社が意味を与えてくれる。そのように社会の側が私たちの「生きる意味」を与えてくれていた。**C**、いまやその「与えられる」意味を生きるも私たちに幸せは訪れない。

3社会が転換期を迎えるときには、評論家とかオピニオンリーダーと呼ばれる人たちが次の時代に目指すべき意味を指し示してくれてきた。そして私たちは「次の時代の潮流に乗り遅れないようにしなければ」と必死だった。しかし誰かが指し示す潮流にただ流されて進んでいくことから、もはや私たちの生き方は生まれえないのである。

かなり前から「これからはモノの時代ではなく、心の時代だ」と言われるようになった。D 新聞などの世論調査を見ても、「モノより心だ」という意識は④ケンチヨに表れてきているし、私もその方向性には共感を覚える。しかし繰り返し「心の時代」が説かれているにもかかわらず、私たちがいつこうに豊かさを感じることはできないのは何故だろう。

それは「心の時代」の「心」が誰の心なのかという出発点に全く意識が払われていないからだ。「心の時代」の「心」が誰の心なのかと言われれば、それは「あなたの心」でしかありえない。4 「心の時代」とは私たちひとりひとりの心の満足が出发点になる時代のことなのだ。しかし、私たちの多くはこれまでのように「誰かが私たちの心を満足させてくれる方法を教えてくれるだろう」とか「心の時代の上手な生き方を示してくれるだろう」と思ってしまったている。

あなたの人生のQOL、クオリティー・オブ・ライフは、あなたが自分自身の「生きる意味」をどこに定めるかで決まってくるものだ。評論家やオピニオンリーダーの言うことを Z ではなく、それは既にあなたの人生のQOLではなくなくなってしまふ。この⑤コンメイする世の中で、「あなたはこう生きる!」「こうすれば成功する!」といった書物が溢れている。そして、自信のない私たちはそうした教えに頼ってしまふようになる。しかし、「おすがり」からは何も生まれない。

「心の時代」とは、私の「心」「感じ方」を尊重しようという時代である。へこれが誰にとっても正しい「心の時代」の過し方だ。などというものはない。自分自身の心に素直になって、自分がいま一番何を求めているのかに従って生きていこう、モノの多さ、地位の高さ、そして「他者の目」からの要求に惑わされず、自分の感じ方を尊重して生きていこうということこそが「心の時代」なのだ。私たちにいま必要なのは、私たち自身の姿を、私たち自身の心を映す鏡なのである。

(上田紀行『生きる意味』岩波新書)

問一 傍線①～⑤の片仮名を漢字に改めなさい。

問二 空欄A～Dに入る適当な語を次の中から選び、符号で記しなさい。

イ つまり ロ あるいは ハ そして ニ しかし ホ それどころか

問三 空欄甲、乙に入る適当な慣用句を次の語群の中から選び、符号で記しなさい。

甲 イ おくびにも出さない

ロ 自他共に許す

ハ 憂き身をやつす

ニ うだつの上かららない

ホ 往生際が悪い

乙 イ 歯牙にもかけない

ロ 柳に風と受け流す

ハ 鶺鴒^う呑みにしてしまふ

ニ 聞く耳をもたない

ホ 完膚^{かんぷ}無きまでにしてしまふ

問四 傍線 1 について、「生きる意味の病」とはどのような状態のことか。文中の語句を用いて百字以内で記しなさい。

問五 傍線 2 とは、分かりやすくいえばどういうことか。文中の語句を用いて二十五字以内で記しなさい。

問六 傍線 3 について、いま私たちが求めている社会とはどのような社会なのか。文中より三十字以内で抜き出して記しなさい。

問七 傍線 4 について、「心の満足」を分かりやすく説明している箇所を文中より百字以内で抜き出し、初めと終わりの五文字で記しなさい。